

愛に飢える女

彼女達の夢は

青山智志

一、ハンバーガー店での女の子の会話

丁度昼時でお店が立て込んでいた。大江広志五〇歳は、仕方なく、三人の若い女の子達が夢中でおしゃべりしている隣に、身を小さくして座り、ハンバーガーをパクついていた。

彼は、自動車部品販売会社の会社社長で、輸入車であるジャガー、ベンツ、アウディ、BMWの部品も扱っている。

「ねえ、ねえ、慶子の話、その後どうなったの」

「それがね、とつてもいい話なのよ。全く夢みたいで、うらやましいわ」

「その夢みたいになって、何なのよ」

「それはね……うんと、都内の一流ホテルに行って、ふかふかのベッドに泊まってきた

とか、エルメスの高級バックを買ってもらったとか、うらやましい事ばかりなのよ」

「ねえ、でもあれもするんでしょう」

「それは勿論よ。でもね、中年の男性って、やさしく、あれがすごく上手いらしいのよ」

「どう上手なのよ」

「そんなこと、私なんかに聞かれたって」

「一度だけでも経験してみたいわ」

と、ここまで聞いたとき、大江は、巷やマスコミで賑やかに語られている援助交際の話だと判った。

そこは年の功、断られてもともとだと考え、勇気をだして、

「あおう、楽しそうな会話、中断させてご免よ、その話、私も入れてよ」

「ええっ、おじさん聞いていたの」

三人の女の子は、腰を抜かささんばかりに驚いた。が、店が立て込んでいたので逃げる場所はない。

「隣にいるんだから、当然聞こえるよ。悪かったかな」

「で、入れてよとは、どういうことよ」

三人連んでるので、彼女達もいささか強気だった。そこで大江は名刺をだして、三人に渡した。

「わあっ、おじさん偉いんだ」

「いや、偉くはないよ。でも、貴女方のパトロンにはなれるよ。もつとも、私とのつきあいを『イエス』といってくれた上での話だが」

「ねえ、どうしよう」

「急にはね。では、あそこの喫茶店でもつと話そうよ」

「うん、それがいいわ。おじさん来てくれる」

と、四人はパタパタといそがしく、その店から出た、喫茶店までの途中、三人の女の子は、じろじろと大江の方をみながら、男の品定めでもしているのか、ひそひそ話をしていった。

大江は、中肉中背であったが、鼻スジも通って男らしく、魅力的な中年だった。特に、笑い顔が人なつこかった。喫茶店で落ち着いてから、三人はそれぞれ名乗ってから頭を下げた。一応の礼儀は心得ているらしい。三人とも高校の同級生で二〇歳、瞳は大学の研究室で教授の助手をしている。洋子は、高卒後アルバイトをして生活している。残る一人は智子で、大学三年生だった。世間慣れしている洋子が、

「困ったことには、三人とも、おじさん、ではなくて、大江さんを気に入っているのよ。で。お手当では幾らくらい。」

「ううん、そうだな。今まで考えたこともなかったが、一回のデートで四万円というのはどうかな」

三人はまたひそひそと相談していたが、再び洋子が、

「それでお受けできます。でも、社長さん、そちらは一体誰を選ぶのでしょうか」

「うーん、皆さん、それぞれ特徴があつてかわいいよ。急なことで、本当に困ったな」

「では、あみだクジにしますか」

「そうなると、二人はあぶれることになるよ。それ、イヤだよ。一回でもいいからデートしたい」

と瞳がいい出した。

「でも、誰を選ぶかは社長さんが決めることよ。私達ではないのよ」

「そうか、うまくいかないね」

そこで、大江は、

「いま、それは決められないよ。われわれは三〇分ばかり前に知り合ったばかりだ。とり

あえず私から連絡することにして、デートの順番だけここで決めておいてよ。それから、初めての手当ては5万円にするよ。デートは月2回くらいでどうかな」

「うわあ：い、わい」

と三人とも大喜びだった。まさに、瓢箪から駒が出たのだ。人生とはまことに不思議で面白い。しかしながら、その裏に、かりそめの愛に憧れる、愛に飢えた女の子が存在するという事実を記憶に留めておかなければならないだろう。

あみだクジの結果は、瞳、洋子、智子の順序になった。そこで大江は、名刺代として、女の子達に一万円を渡し、

「スーツやバックでも買うときのたしにしてよ」

智子は、

「これ、本当にいただいているの」

といいながら、瞳、洋子の二人に何やら目くばせしている。三人は、一斉に、

「有難うございました」

といい、晴れやかな顔で喫茶店を出ていった。別れ際に、洋子が、

「あれ、まだの子がいるかもよ」

と、大江に耳打ちしていったが、息が耳元にあつたかかった。

瓢箪から駒が出るとはまさにこのことであろう。大江にしても、ある日突然こんなうまく話がとんとん拍子に進むとは全く予想外だった。彼も五〇才、自分の人生の先が次第に見えてくる。一生に一度位若い女と旅行したり、何か夢になれるものはないか、と密かにさがし、願望していたのだった。そういう男にとって、援助交際は最もおいしい話で、世のモラルの乱れにつけ込んだ男のエゴであることは十分に承知していた。他方、彼女達にしてみれば、友人の一人がすでにうらやむような生活をしており、幾分ねたみと憧れを持っていてところでの話で、まさに渡りに船である。しかも、この場合、三人連んで話を聞いたので、男に対する警戒心はほとんどもっていないだろう。

バブル期に生まれ育ったこの年頃の女性は、いい生活、ブランド品に対する憧れが人一倍強い。逆に、不倫の意識なんて全くないであろう。まさに、フリーセックスの時代の自由を謳歌しているのだ。

二、女との邂逅（めぐりあい）

三月、そろそろ桜の花が咲きはじめる頃だった。快晴の日の昼さがり、渋谷の街角にあ

る、とあるラブホテルの一室にて、可愛い顔をした瞳がおびえていた。

「ねえ、乱暴しないでよ」

ベッドに横たわらず、腰かけているが、バスタオルだけでスッポンポンだ。

「かわいい瞳ちゃんに、乱暴なんかしないよ。心配しないで」

「うん」

バスルームから出てきた大江は、彼女の顔に近づきそつとキスした。うりぎね顔で、色白で、目もぱっちりしていて、なかなかの美人だった。それから大江は、

「さあ、いい女だから、そこに横になりなさいよ」

「うん」

横になっても、バスタオルを執拗につかんでいる。これは恥ずかしいからか、それとも処女の本能であろうか。部屋はうす暗い。その動作、おびえ方から処女であろうことは明らかだ。

「さあ、一寸これ下げてよ」

二〇センチぐらいバスタオルを下げると、びくつと二つのピンク色の乳房が現れた。部屋はうす暗いが、肌が白いので、輝くように美しい。それに口唇をゆつくりはわすと、

「いやっ、くすぐりたい」

といて顔を左右にふつたが、手で拒絶はしない。さらに吸い続けると、かわいい顔が少しゆがんだ。

「大人は誰でもしていることだから、こわがらないで」

「うん、わかっている」

つぎに、手をゆつくり花芯のふさふさしたところにはわせた。彼女の固く緊張している身体がピクツと反応した。少しふるえているようだ。

昨日、ホテルで彼女と食事をともにしたときの大言壮語とはまるで違う。

「ホテルなんてへっちゃらよ」

と確かにいったが、それは強がりで、やはりまだ二〇才になったばかりの、ういういしい女の子だった。大江は、大人の知恵で、あまり手間どっては不首尾になるかもしれないと思い、意を決して、あのワレ目に指をさし入れた。その途端に、

「いやよ、指なんか」

だが、そこは少しぬかるんでいた。いやいやをしながら、成熟した女の肉体は発情していた。

「では、いくよ」

渡りに船だ。指はいやだというから本物をそう入するしかない。

「入ったよ。瞳ちゃん」

と彼女の身体をいとおしそうに、だがしっかり抱きしめた。

「うん、何だか暖かいみたい」

「動かすよ、いい」

「うん」

それから、ゆっくりとピストン運動をくり返すと、はじめは、固くゆがんでいた顔が、花卉が開くみたいに、口が半開きになり、

「ああっああっ」

とあえぎはじめ、両手を大江の背中にまわしてきた。いよいよ、これは感じはじめていると思いい、無我夢中で腰の運動を早めると、

「ああっいいっ」

それを繰り返すうちに、身体を少し上にそらしたかと思うと急にぐったりしてしまった。目には涙が溢れていた。

「やれやれ、処女とは扱いにくいものだ」

しかし、この年で、小きざみにふるえる処女を抱いているのは、男冥利につきる。

「この俺に、こういうすばらしい機会や幸運がめぐってこようとは」

まさに男子の本懐これにつきることはなく、至福の時だった。

ラブホテルから二人が出てきたときには、日は西のほうに傾きつつあった。すでに四時半をまわっていた。喫茶店で瞳は、それまでのしおらしい態度を一変させて、

「これでやっと大人の女性になれたわ」

と目を輝かせた。

「というと、喜んでいるのかな」

「うん、そうよ。皆んな、痛かった、痛かったというから、それが心配だったの。やさしくしてくれて本当に有難う」

「相手が若い場合は、自分の欲望が先走り、女性のことを考えず性急にことを運ぼうとするから痛いこともあるだろうね」

「そう。それで、大江さんの方はよかったのかしら」

「うん、よかったよ。貴女の身体すばらしいよ。白いボディは輝くばかりだった。

「いやねえ、身体までみているの。恥ずかしいわ。でも、私はおぼこ娘だったから、もう呼んでくれないかも」

「そんなことはないよ」

「でも、まだ二人もいるじゃありませんか。本当にもう一度呼んで下さい。お願いします。」

お手当てなんかありませんから。私、大江さんが好きになりそう」

まだ、大江の身体のぬくもりが残っているのだろうか。初めて身体を許した相手に対する女の執着であろうか。

「それは有難う。ところで、今迄にこういう機会はなかったの」

「そうね、三回くらいあったかな。一度なんか、ラブホテルから逃げだしたこともあったわ」

「えっ、それは大変だったね」

「だって、男の子ったら、部屋に入るや否やすぐスーツを脱がせようとするのよ。しかも、目をぎらぎらさせて。そんなの嫌だわ」

「そうだね」

それから、白い封筒をわたすと、彼女はこぼれんばかりの笑顔で、

「本当は辞退してもいいんですけど、先日の約束があったわね」

路上での別れ際に、

「近いうちにきつと呼んで下さいね」

といい、何度も振り返りながら遠ざかっていった。うら若き乙女から、去りがたいという恋情を示されては、彼の胸にもぐつとくるものがあり、まさに青春の復活だ。

「これは、中年の男女間のいわゆる火遊びではなく、男と女のまことの真情が入ってきそうだ」

そう呟くのがあった。世間で批判されている援助交際であっても、当人達はまじめに向き合い、真剣そのものかもしれない。大江にとって、これは全く久しぶりに感ずる恋情であった。

「彼女が心からいとおしい」

と思ったが、ふと古女房の顔がうかんだ。

三、しやれな洋子

大江が洋子にやっとの思いで電話したのはあれから一ヶ月も経ち、すでに、桜の花が散り、木々が新緑につつまれる四月下旬になっていた。瞳の心情を思うと、何だか彼女を裏切るような気がしてならなかった。ということは、大人であり、酸いも甘いも心得、手練手管にたけた中年の男である彼が、瞳の清純さにすっかり惚れこんだことを意味するであろう。

二、三日前に瞳の勤務する研究室に電話してみた。

「こちらはA大学研究室でございます」

その明るい声に、大江の胸がたかなった。

「お元気ですか。大江です」

「あら、おめずらしいですね。……嬉しい。本当に嬉しいわ」

涙ぐんでいるような声だ。

「で、社長さまこそお元気ですか」

「はい、相変わらずですよ。月日ばかり、経っていますが」

「ねえ、大江様。彼女達ずっと待っていますわ。昨日もそのことで電話があつたのよ。そして、私だけがいい思いをしたとって攻めたてられたわ。私、少しジェラシーを感じちゃうけど、彼女達をクビにしないのなら早く会ってあげてよ」

「うん、そうか。実をいうと、貴女に悪いような気がしてためらっていたのだが」

「そう。でも仕方ないでしょう。三人連れでなければ、あのような話絶対にうけなかったのよ。私一人なら、話かけられても、逃げ出していたわ。私は大江さまの夢でもみながら待っています。それは辛いことですが、彼女達もなぐさめて上げてよ。その後で、私とデートしてよ。願います」

そういわれてやっと決心した。ぜいたくな約束が、いまや大江の心の負担になりつつあるのだ。人生には何事も無償のものはない。いわんや、男女関係においてはなおさらである。

ともあれ、デートの当日、陽春の太陽が輝く日で、洋子はモデルのように、薄いブルーのツーピース、同色の靴、パラソルを持って現れた。ただ、手袋は白いレースだった。大江は、そのかわいらしさと変身ぶりにわが目を疑った。過日三人で連るんでいたときの洋子とはまるで別人だった。それなりに美しい。何故それなりにかというのと、大江のまぶたには、瞳の美しい残像が焼きついているから、そういったままだ。

「ほう、モデルみたいだね」

感嘆の声をあげた。

「でしょう。あれからね、社長さん、じゃなくて大江さんに気に入ってもらうために研究したのよ。女心って、いじらしいでしょう」

どうやら、洋子は押しつけがましいところがあるらしい。それはともかく、たかだか中年の男に気に入ってもらうためにこのように変身するとは。

「おんなどは不思議な生き物だ」

そうつくづく思うのだった。しかし、そうすると大江の妻君なんかは、中年太りで、女

を放棄しているといえようか。子供がないこともあって外出ばかりで、夫が何をしようと無関心で、勿論おしゃれなんかに関心がなさそうだ。

その点、若い女の子はお金が入るアテでもあると、無理をしてでもおしゃれをして、男の歓心をおおうとする。そこが、実にいじらしい。ラブホテルに入ると、洋子は自分からキスしてきた。

「ねえ、瞳とはどうでしたか」

「えっ、それは聞かないですよ。それは貴女と楽しむために来たのだから」

「そうでしたね。ご免なさい。で、シャワーは私からでいいでしょうか」

「うん、そうしてよ。ところで、洋子さんの仕事、何だったっけ」

「私の仕事、雑誌社の受付よ。以前は、喫茶店やパン屋で働いていたけど」

大江がゆっくり時間をかけてシャワーを浴びてベッドに戻ってくると、彼女はバスタオルをお腹にまいて、にこにこして待っていた。

おっぱいは見えかくれする程度で、どうやらEカップだった。あおむけにねた彼女の上からおおいかぶさるような姿勢でキスし、バスタオルをはぎとった。形のいいEカップをゆっくり両手でもみ上げたり、吸い込んだりすると、

「ううん、ううん」

と悶え、

「気持ちいい」

といったが、大江の一物にも手を伸ばし、小さきみに動かし、彼の方も気持ちよかった。こういうことをされるのは何年ぶりであろうか、記憶にない。彼は頃合いをみはからって花芯にさぐりを入れると、もう愛液で満ちていた。最早待つ必要はなからう。花芯にむかってそそりたつたシンボルをそう入した。

「ああっ、ああっ、ううっ」

あえぎながら、

「いい、いい気持。大江さんすごいわ。」

といい続けるのだ。彼が強く彼女を抱きしめ、ピストン運動を早めると、彼女もそれに合わせて腰を動かし、

あん あん あん あん あん

「一、二、三、一、二、三」

船の口をこぐようなリズムカルな動きが、五、六分も続いたであろうか、突然

「ぐく、ぐくっ」

といって、歯ざしりしながら、白い身体を海老のように伸び縮みさせて果ててしまった。

大江もこれに合わせたので二人のオルガスムスは一致した。……あとは、ホテルの一室にしばしの静寂の時が流れた。大江も久しぶりであったので勢力を使いつくした感じで、少し重心をずらしたままで彼女の身体を抱いていた。

ところが、これはびっくり、彼女は口を半開きのまま眠っているではないか。大江も仕方なくそうしていると何時の間にか、とろとろと眠りこんでしまったらしい。

「なんと豪胆であろうか」

洋子は、はじめてベッドを共にした男の腕の中で眠り込んでしまうとは！ 五〇年生きてきた大江にも初体験だった。誰からもそんな話はきいたことがない。それほど満足したということか。それとも、彼女が稀有な性格の女というべきであろうか。いずれにせよ、大江にとつて、この女も愛おしい。

大江が少し手を動かしたので、その震動で目をさましたらしい。彼女は、

「あああ、頭が真っ白で、夢のなかだったみたい」

「そのようだったね」

素晴らしいながらやさしくキスした。彼女も大江をいとおしむかのように首に手をまわしてきた。そして、

「ねえ、私どう」

「ううん、すばらしかったよ。まるで船をこいでいるみたいだったよ。運動神経がすばらしいね」

「また会ってくれる」

「うーん、それは三人皆んなに会ってから決めるよ、そういう約束だったからね」

「それはそうだけど、私、大江さんと合いそう、そう思わない」

「うん、そう思うよ。洋子さんがすばらしい運動神経の持ち主であることは認めるよ。いい女だ。かわいい。しかし、残念ながら、私には古女房もいて、洋子さんの独占とはいかないよ」

「そうね。この世は本当にままならないわね」

「ところで、貴女はどうしてアルバイトなんかしているの。当節の言葉で表現すると、草食系かな」

「うん、そうかも知れない。よく分からないわ。でも一つはつきりしていることは、その方が自由だからよ。正社員になったら責任も重く、残業もあるし、今日のように、平日の真昼間に出てこられないから」

「結婚したいような男性はいないの」

「いないわ。私のまわりには頼りない男ばかりよ。でも一人いて、一年くらい付き合った

けど、彼氏の家庭がいろいろ複雑なのであきらめたの。彼も強いてとはいわなかったわ。彼と別れてから、誰かの愛人になりたいと考えるようになったの」

「中年の男にあまり期待しないほうが良いのでは」

「でも、やさしいってよ。現に大江さんもとってもやさしい。これは例外かしら」

大江は自分の身支度が終わって彼女をみると、もう終わっている。きれいに化粧までしている。実に素早い。何時ものろろしている古女房とは大違いだ。何もここで二人を比較することはなかったが。

それから、五万円入った封筒を渡すと、にっこりほほえんで、

「いい思いをさせていただいた上に、お金までいただいて恐縮しています」

と、大人びたい方をした。それから、

「私も久しぶりだったけど、大江さん、やっぱり女の喜ばせ方、扱い方に慣れているわ。

私は超満足、もう一回したいわよ」

「いや、今日はもう時間がないよ。そろそろ社にもどらなければ。今日中に決済しなければならぬ書類もあるだろうし」

「そう、やっぱり、社長さんは忙しいんだ」

「悪いね。俺もまた洋子さんに会いたくなるかも」

「是非そうしてよ。ねえ、もう一度キスして」

目が怪しく光っている。彼女の舌に自分のそれをからませてから、両手で強く抱きしめると、

「嬉しい」

といった。それからラブホテルを出て、二人はそれぞれ右と左に別れた。遠ざかる彼女の靴音がひびいていた。

その日から数日が過ぎ、大江は社長室で何やら物思いにふけていた。どうやら、中年の男の恋患いかも知れない。

「社長、どうかなさいましたか」

「いや、何でもないよ」

といてごまかしたが。それは、一口でセックスといっても、相手である女によって大きく変わることだった。現に瞳と洋子とでは、話題もあの時の恍惚感の表し方もまるで違っていた。

「何故かくも違うのだろうか」

両方とも、男として、十分に満足したが、

「愚妻とは、どうなんだ」

長くセックスレスであるが。結婚という社会的枠組みにどっぷりつかってしまつて、何時の間にか、夫の歡心を引こうなんてさらさら考えていないようだ。彼女にも輝いていた昔があったからかも知れないが、それは昔日の思い出にすぎない。家庭というのは安らぎの場であるはずである。しかし、現実には、何と味気ないことになっていることか。テレビのコマーシャルではないが、クリープを入れないコーヒーのようなものだ。

「一体誰の責任だろうか」

恋人とは、そもそも冷めやすいものだろうか。人の心とは、うつろい易いものだとはいふことを言ったものであろうか。論語に『四十にして惑わず』とあるが、大江は五十にして迷っている。どうして、家庭がこうも味気ないのか。家庭というぬるま湯につかつて、世の中年男は、そこからぬけだせなくなっている。何と不自由なことか。

四、将来性豊かな智子

三人目の智子に会うのは、正直なところ、気が重かった。

また、いい女だったらどうしようかと、他の中年男達が聞いたら、涎を垂らしそうなことに、気まじめな大江は悲鳴をあげそうな心境になっている。三人のうち、一人を選ばなければならぬとすれば瞳を選ぶだろうという気がする。しかし、やはり智子に会おう。会つて気がむかなければ、五万円渡して帰つてこよう。

このように思い悩んでいる大江に対して、智子のほうは、どこ吹く風で、乙女心をふくらませ、期待と漠然たる不安をいだきながらも、彼が指定した渋谷の喫茶店に現れた。そして、

「しばらくぶりでございます。本日はお呼びいただき嬉しく思います」

家庭の躰がよいのか丁寧に挨拶するのだった。どちらかといえば、尻軽で貞操観念のうすい女の子を想像していたが、三人連れでいるときとは違って、一人になると学生でも一人前の成人した女性だった。大江の方がすっかり出鼻をくじかれてしまった。

「いや、遅くなって、まことに申し訳ありませんでした」

「いいえ、とんでもございません」

「ホテルに行きましようか」

「はい、お供いたします」

で、よく見ると、やや丸顔であるが、顔立ちはととのつており、目がひとときわ輝いて、魅力的な女性だった。

「大学では何を専攻しているのですか」

「英文学専攻です」

「面白いですか」

「いいえ、まだそこまで行ってはいません。大江様の大学の学部は」

「工学部です。もう古い話ですが」

「話は変わりますが、大江様の女性関係は多いのでしょうか。これは失礼を承知でおたずねしているのですが」

これではまるであべこべだった。今夜は、彼女にイニシアティブをとられ続けている。

「いや、それが殆どありません。」

「では、三月のあの日偶然に私達の話の横でお聞きになり、ああいうことになったのでしょうか」

「そう。全くその通りです。まことに申し訳ありませんでした」

「いいえ、あやまる必要なんか、全くありませんわ。では、若い女性との交際は」

「全くありません」

「そうですね。実を申し上げますと、大江様については、瞳と洋子に譲ろうと考えていたのです。友人の間で、物事を複雑にするのはトラブルのもとですから。でも、いま気が変わりました。大江様は、誠実でスマートな中年です。もしも、貴方様が私を気に入って下さるなら誠心誠意お付き合いしようと思います。大江様という男性を通じて何を学ぶか分かりませんが」

「そうむずかしく考えないで下さいよ」

「でも、たとえ不倫の関係でも、女の命を捧げるのですから、何かを学ばせていただきます」

やはり、大江がひそかに案じていた通り、少々むずかしいことになってきた。

「私がいいなかったのは以上です。あとは少しまぬけな智子がいるだけです。家で、父や母によくそういわれています」

そういいながら、あどけなさの残る顔を大江に近づけ目を閉じた。大江はゆっくりと口唇を重ねた。何だか、ひんやりした感触だったが、胸のほうは熱くなった。それから二人は再びキスしながらベッドインした。智子が彼の首に手をまわしたまま離さなかったからだ。乳首に舌をはわせると、少しくすぐったそうな顔をしたが、やがて悶えはじめた。が、つぎの瞬間大江の股間に手を伸ばしてシンボルを入れようとする行動に出た。大あわてした彼は腰をぐっと落とし、それに合わせた。

「わあ、大きいものが入ったわ」

「気持ちいいの」

「いいえ、まだ。でも何だか暖かいわ」

「動かすよ」

「はいっ……。ああっ、ううっ、これがセックスなの、いい気持ち」

「そう、気持ちいいの。早くするよ」

「ああっ、切ない、耐えられない、いいわ」

「もつと気分だしてよ」

「ああっ、こんなにいいものなの。とろけそう。大江さん、いいわ」

「もつと、もつと」

「ああっ、ふううっ」

といいながら、ベッドのシーツの端をつかんで、夢中でひっぱっている。ここらで、いきそうと思った大江は、

「いくよ」

「はい。ああっ」

二人の動きがびったりと止まった。あれほど激しく絡み合い悶えたのに。それから、シンとした静かな時が流れた。

しばらくして、彼を見つめながら智子は、

「やはり、大人とのセックスはすばらしいわ。もう、精根尽きはたしましたけど」

「そう。でも、どうしてそういえるの」

「自分の恥をさらすようですが、若い男の子は、がっがっと入れたかなあ、と思ったらもう終わりでした。草食系男の子にはそういう傾向が強いようです。まあ、イケメンの男から子種である精液をもらうのなら、それでもいいですけど」

「若い時は、特に結婚して間もない頃はそうかもしれません」

「そうですか。私、やっぱり大江様とこうなってよかったですわ。今何だか清々した気分です。女が何故夫以外の男性を求めるかも大体わかりました。男も同様でしょうけど。」

こんな生意気なことをいっている智子はかわいくない女だと思われるから止めますけど」

「いや、それは貴女の個性だから止めなくていいよ。私に遠慮などいらナイよ」

「でも、私はセックスするより食い気ですよ。おいしいものに目がないわ」

「若い女性なら誰でもそうですよ。性の問題は文学じゃないけど、神秘で、奥深い。経験の乏しい私など論ずる資格すらありません」

「そうですか。いろいろ有難うございます。どうも、私は理屈っぽ過ぎますよね。あのと

きめきのように自分の気持が自然に出せると面白いのですけど」

「あるとき、何と行ったか憶えているの」

「いいえ、全く。でも恥ずかしいわ。何を口走ったかしら」

「いや、少しからかっただけ。そんなこと気にする必要なんかありませんよ」

「はい、そうでしたわね」

それから、シャワーを浴び、二人とも帰り支度をはじめた。彼女は何を思ったか、すばやくコーヒーマシンの用意をしてくれた。

「コーヒーでも如何ですか。本当はお酒がよろしいのかも」

「いや、有難う」

家庭での躰がよろしいのか、それとも大江よりさらに何か話がしたいのか。

「ところで、大学卒業後は何をするつもりですか」

「あの私ですか。大学院に進学することと一年位英国に留学することが大体決まっています。したがって、これから英語それ自体及び英文学を必死で勉強しなければなりません。浮気している暇なんかありません。恋人もいませんけど。何年か後には、英国で今日のことを恋しく、なつかしく思い出しているかもしれません」

「そういう貴女の考え方は少し淋しすぎるのでは。何時でもまた会えますよ。われわれの間に何の制約もありませんから」

「それはそうですけど」

「実は、私は社内で二回ほど英国に行ったことがあります。貴女は英国の何に関心がありますか」

「えっ、そうですか。やはり英国を代表するケンブリッジとオクスフォード大学をじっくりみたいですね」

「うん、なるほど。それから」

「はい、英国を代表する劇作家ウィリアム・シェイクスピアの故郷ストラットフォード・アボン・エイヴォンを訪ねてみたいと思っています。多くの謎にみちた生涯であったと『英文学』の講義で学びましたから」

「うーん、そう。では、彼が埋葬されている教会の墓の墓碑銘の謎についても知っている

91

」はい。でも、自動車会社の社長さんがそういう事までご存知でいらっしやるのは驚きですね。本当に！ 学がおありになり、私、尊敬しちゃいますわ」

「いや、それはとんでもない誤解だよ。私はただ、ガイドが語ったのを覚えていただけだよ」

「でも、やっぱり、すごいことですよ」

「そう、褒めて呉れてありがとう。その他に、イギリスで関心のあることは」

「大江さん、さすがに社長さんだけあって追及が厳しいですね。私には、英国は、未だ見たことのない、未知の国ですよ」

「それはそうだね。で、あの美しい湖水地方はどう。最近では、日本人旅行者の観光ルートに入っているという話だが」

「ああ、湖水地方ですか。私には、ワーズワースやS・T・コールリッジなど、詩人に愛された美しい所としか知りませんが。でも、自動車会社の社長さんが何故そんなことまでご存知なのでしょうか」

「ああ、そのことか。智子さん、イギリスにはドイツのベンツにも匹敵する世界の名車の一つ、ジャガーという車のあることを知っているだろうか。最近では日本でも増えてきたよ」

「私は車のことはよく知らないのですよ。で、その車について大江さんの会社でかわりがあるのですか」

「うん、その車の部品をすべて輸入しているのだ」

「そうですか。そういう関係でイギリスにいらっしやったことがあるのですね」

「そうだよ」

「その通りかもしれませんが、ビジネスの世界では世界の色々な国とつながっているのですね」

「うん、単に物だけでなく、人もそうだよ。世界中の何処へ行っても日本人の顔を見掛けるよ。……。ところで、これはもう十五、六年も前の話ですが、湖水地方のレイク・サイドというホテルで、風邪をひき、それが原因かどうかわからなかったが、軽い盲腸炎にかかり、二週間もホテルで寝込んだことがあります。その時世話になったウィリアム・サリーというウエイトレスがいました。最近はどうしたのか、クリスマス・カードも来なくなりましたが」

智子は、この話を目を輝かせて聞いていて、微笑をうかべながら、

「その方とダンディな大江さんとの間には何かありましたね。うふふ。面白がっては悪いかしら」

「うん、まあね」

「大江さんにはまだ他にも浮いたお話がいろいろありそうですね。やはり、ただ者ではありませんね」

「いや、他には何もありませんよ」

「そうですか。で、そのサリーさんとは英国で別れたきりでしたか」

「それが別れて二年後に、突然何の前触れもなく日本にやって来ましてね。家にも来ませんでした。外国の女性というのは主体性といいますか、意思が強く、行動力があることにびっくりしました。日本は東洋のはずれにある遠い国ですが、彼女にとって、日本に来ることなんて平気なんですね。国際性が豊かであるといえればそれまでですが。私は子供はいないのですが、妻がいることをしつかり確かめてから、あきらめて帰って行きました」

「うわあ、すごい！ 小説にでもなりそうな話ですね。私もそのような紳士にお会いしたものです。それはともかく、その英国人女性の愛した男性も大江さん、そして、今私の目の前にいらつしやる方も大江さん、何だか不思議なことですね。私には、その英国人女性の切ない気持が手にとるように分かるようで、何だか泣きたくなりました」

「つまらない昔話をしてすみません。そろそろここを出ましようか」

「はい、お別れにもう一度キスして」

二人は、熱い熱い、そして長い長いキスをした。

「有難うございました。では、さようなら」

智子は、何故か、寂しそうに手を振った。女として、今日の体験をこやしにして、ひとり英文学の道をきわめなければならぬからであろうか。それとも、やはり、大江を瞳か洋子にゆずることに対する乙女の感傷であろうか。

長い春の日も傾き、渋谷の街に夜が訪れつつあった。人、人、人の雑踏の渋谷。大江はようやく三人の女の子の品定めが終わり、ほっと肩の荷を下ろすのだった。そして、

「やれやれ、女道楽も精神的に大変だった」

とぼつりつぶやくのだった。

五、宴の後での悩み

それから数日後、中年の大江は年甲斐もなく、物思いにふけりはじめののだった。そして、今後春秋に富む三人の娘とは会うべきではないと考えるのだった。それは、

「いわゆる援助交際は一時的によくても、長い目ではこれからの長い彼女達の人生をくるわせるのではないか。やはり、これは男の、いや中年男のエゴであり、良識ある中年のすることではない」

と思うのだった。

確かに彼女達は、中年の男と付き合うことに何の抵抗感もないようだ。しかし、根本的

には、何故か愛に飢えた女達で、人間のぬくもり、家庭の暖かさを知らないのではなからうか。否、彼女達だけでなく、社会の若い女性の多くは、援助交際に何の抵抗も感じておらず、現代社会の病める一面を表わしているのであろう。最近では、パートに従事する主婦が多くなって、子供が学校から帰ってきてても母親が家にいない場合が増えているのだ。父親にいたっては日曜か休日ぐらいしか顔を合わせられないかも知れない。これでは、人間のぬくもり、家庭の団欒に欠けるのだ。また、彼女達が、優しい中年のおじさまと付き合い合っでは、ますます理想の男性に出会いにくくなってしまふ。

しかしながら、窓外の景色をぼんやり眺めながら大江は、

「そうはいつでも、個人的には俺の人生で、もう二度と彼女達のような若く素晴らしい女の子に出会うことはないだろう」

とも思うのだった。まさに宴の後で、ハムレットの心境になり、悩んでいるのだ。三人のどの子と選んでも、申し分なからう。まさに男冥利につきる話で、天の与えた絶好の機会だ。

積極的に行こう。その方が自分のためだ。

また、夏のある夕暮れ時には、別の考えが頭をもたげる。結婚適齢期の最近の男性の不安定な雇用と低い所得は彼女達にしてみれば、

「たよりない男の子達」

とうつるのであろう。これでは、日本の社会において、ますます未婚化は避けられないであろう。彼女達との援助交際はますますその未婚化を促進することになりはしないか、と考え、心は千千に乱れるのだ。

「社長、そろそろ会議が始まりますよ」

と、秘書にいわれて、

「おう、そうか」

彼の物思いは突然中断されてしまった。

それから二、三時間が経ったであろうか。夕方七時頃、渋谷の駅前の交差点で信号待ちしていると、低い女の声で、

「社長さま」

と呼ばれたような気がしたので、後ろを振り返ると、

「あ、貴女は瞳さんではないか」

かわいい、なつかしい顔が笑っていた。色も雪のように白いが、笑った口元が実に美しい。

「お久しぶりです。もう初秋ですよ。あれから随分経ちましたわね」

「うーん、そうだね、……、せっかくだからお茶でも飲むか」

「はいっ」

何時の間にか、むし暑い夏が過ぎ、渋谷の街角にも初秋のそよ風が吹き始めていた。夕方になると何となく秋の気配が感ぜられる頃になっていた。喫茶店の椅子に座ってから瞳は辺りを見回しながら

「大江さんから二度目のお呼び出しがないから皆んなあきらめたみたいよ。それに大江さんのような立派な方が私達のような小娘は相手にしないわ、と智子がいつていましたけど」

「そうか」

大江はただ笑っているだけだった。何を言っても弁解になる。お詫びを言うにしても、時が経ちもう遅すぎるのだ。

「その後、瞳さんには何かいいことがありましたか」

「ううん、何にも。合コンのお誘いは時にあるけど、行ったことはないわ。男の子も大した仕事もしてないけど、夢がないのよ。」

お酒飲んでわいわい騒いでいるのは時間の無駄よ。もっとしっかりした人生計画を立てるとかしてほしいわ」

「そう。瞳さんにしてはきびしいね」

「うん、それにお酒飲んで馬鹿騒ぎしているだけじゃ生活できないわ」

「ほう、あれから六ヶ月位が経つけど、随分現実的な大人になったね。やはり、若い人は成長が早い！」

「えっ、そう。この私を大人にしたのは、他ならぬ社長さまではありませんか。そのこと私は生涯忘れませんよ」

そんな会話を交わしながら、大江は去る三月の彼女の白く、はじけるように輝くボディを思いだし、だんだん胸が熱くなってきた。

その心うちを知ってか知らずか、

「ねえ、大江さん、もう一度でいいから連れて行ってよ。瞳一生のお願い」

「えっ、そう。もう諦めたのじゃなかったの」

「うん、洋子や智子と同じように諦めようと思ったわ。でも、ここで偶然お会いしたのが百年目よ。もう離さないから。この胸がはりさけそうよ」

その目は何かを必死に訴えていた。

「そうか。……、では、社に電話し、指示しておくことがあるから一寸失礼するよ」

「そう、嬉しい」

ここにいたって、大江の大人としての理性は一ぺんにふっ飛んでしまった。もう逡巡は

しなかった。

「一度くらいならいいだろう」

完全に彼女の色香に迷い込み、その中で溺れる中年男になりさがっていた。この数ヶ月あれほど悩んで来たのがウソのようだった。中年の男の理性なんて、かくも脆いものなのか。

それにしても、一度身体を許した相手に対して、女の瞳は強気だった。それが彼女の人生において、吉とでるか凶とでるかは神のみぞ知るところであろう。

ところで、大江は、なかなか席にはもどって来なかった。喫茶店の入口まで行ったことは、さっき目で追っていて知っていたが。それから二〇分近く経ち、瞳は、

「しまった。逃げられたかな」

そう思うと、胸の動機が早くなり、落ち着かなくなった。

「どうしよう。でも、大江さんにかぎって、そのようなことは」

辺りを見回したが、知らない人ばかり。入口まで見に行ったが、彼の姿は何処にも見あたらなかった。それから、さらに五分ぐらいたったであろうか。やっと彼の姿が確認された。彼は足早に近づき、

「待たせたな。では、そろそろ行くか」

「うん」

やがて二人は、夕闇迫る渋谷のラブホテルに姿を消した。